

Title	日韓条約批准反対運動の中のキリスト者たち：1965 年救国祈祷会を中心に
Author(s)	高, 萬松
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.2 : 2-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3146
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

日韓条約批准反対運動の中のキリスト者たち —1965年救国祈祷会を中心に—

高 萬松

1 はじめに

本研究所とソウルの長老会神学大学校は「日韓関係100年（1910-2010）と日韓キリスト教会の交流」に関する日韓共同研究を実施している。本研究ノートはその研究成果の一部として、1965年前後の両国教会における日韓条約を巡る関わりについて分析したものである。

1965年6月22日に日韓基本条約が東京で仮調印されると、韓国では国会での批准を阻止する反対運動が展開された。その反対運動には反日感情が根幹を成していた。このような社会的雰囲気があったにもかかわらず、その2年後、1967年に日韓のキリストの教会が宣教協約を結ぶようになった。わずか2年の前には、韓国の教会が力を合わせて反日の隊列に加わっていたが、両国の教会の関係がそのような急転したきっかけは何であったのだろうか。二つが考えられる。

一つは、韓国側での「救国祈祷会」であり、もう一つは日本基督教団総会議長の訪韓である。前者は1965年7月と8月に全国的に展開されていた祈祷会である。この祈祷会の中で「日本のキリスト者に送るメッセージ」が採択され、韓国のキリスト者たちの志が日本の教会に伝えられたと思われる。そして同年9月に日本から韓国基督教長老教会創立第50周年記念式に日本基督教団総会議長が招待されており、その機会を通して相互理解が深められたと思われる。（特に、「日本のキリスト者に送るメッセージ」は日本の教会資料には見あたらない。ここで取り上げるのは意味があるであろう）。

2 状況

日韓会談は国交を樹立するために1951年にはじまったが、中断を繰り返した。1961年以降の軍事政権は日

韓会談に強い意欲を示し、1961年12月には日韓首脳会談が開かれた。1964年に入ると日韓会談に対するアメリカの圧力も増して、日韓両国のあいだの動きが活発になった¹。5月調印の噂もあって、1964年3月6日には野党連合勢力は社会、宗教、文化などの各界の代表知識人とともに対日屈辱外交反対闘争委員会を結成し、「会談の即刻中止」を要求した²。そのような野党や知識人の動きに、実際的に行動勢力として学生たちが合流した。1964年3月24日に学生5000名がデモを繰り広げ、1960年の「四・一九学生運動」以後、最大の運動となった³。1964年6月3日にはソウル一帯に非常戒厳令が宣布された。このため反対運動の団体も解散されたが、1965年2月20日に日韓基本条約が仮調印されると、これを前後にして反対運動は大きく拡大した⁴。

さらに日韓条約が1965年6月22日に東京で調印されると、韓国国内では批准反対運動が始まった。「キリスト者として祖国の運命に対して傍観することはできない」⁵という趣旨で、牧師たちは救国祈祷会を開き、それは全国的に拡大された。1965年を戦後史における反日運動の頂点と見る研究者もいるほどである⁶。その反日運動には反政府運動の性格も含まれていて、池明観はデモ隊の民衆を見、その民衆の抵抗の力が「韓国の民主化運動における勝利に連なること」⁷となったと見なす。しかしわれわれは民衆の中のキリスト者たちに注目して見たい。彼らはデモではなく、「危機の克服は神による」⁸という信仰を以て「救国祈祷会」を開催したのである。その中で「教職者救国委員会の声明」と「日本のキリスト者に」送るメッセージが発表されたので、これらの文書がどういう意味を持っているか考察して見たい。

3 「教職者救国委員会」の声明

1965年9月18日付の『教団新報』は、日韓条約をめぐる韓国教会牧師たちの「教職者救国委員会の声明」⁹を抄訳し掲載している。それは1965年7月11日に韓景職他教職者240名の連署で発表されたものである。以下、その声明の概略を見よう。

一言で声明は、キリスト者が歴史形成に参与すべく当為性を力説している。三箇所を引用しよう。まず、歴史形成に参与する意思は預言者と使徒たちに見られるということを前提で、「第一、キリスト者として、われわれは祖国の運命に無関心ではありえない」と宣言している。日韓両国の外交関係の回復は韓国の歴史にとって重大な事件であるので、キリスト者が「聖霊の導きにより自由な市民権を行使し、キリスト者の神聖な義務を遂行することは当然なこと」と理解されている。「第二、われわれキリスト者は個人においても国家においても、真実な和解の精神によって共通の利益を見いだすべきであると主張する。真の和解のためには、過去に犯されたあやまちの真の悔い改めと新しい歴史を形成するための善意に基づく奉仕と協力の約束が何よりもまず行なわれねばならない」、と述べられている。真に和解するためには悔い改めが必要だという主張はキリスト教の精神である。真の和解に至らない理由が次のように記されている。「不幸にして日本は、ただ国家の利益を促進する国際的経済組織を強化するためにのみ熱心であった。日本のこの態度は韓国民の心に敵意を生じ両国民の間の憎悪を深めただけであった」。そして第4番目に戦いの精神とも言うべき主張が見られる。すなわち、「第四、われわれキリスト者は、あらゆる形の専制主義、不正、破壊と戦う。われわれは経済、文化、道徳、政治その他あらゆる分野における不純な外的影響への服従とその征服者に対して戦う。われわれは、聖霊の導きと祈りと務めとによって祖国のために働くことを誓う。1965年七月一日韓景職他教職者二四〇名」¹⁰

以上のような内容の声明を『教団新報』に載せた編集者は、このような意見が当時韓国教会の一部の意見であると、次のように注記している。「以上は韓国教会の有志による日韓条約に関する声明書の要旨である。韓国教会全体の意見ではないが、同条約についての韓国の人々の気持ちを知る上にたいせつであると思う」¹¹。しかしそのような見方は当時の韓国教会の実情を正しく把握していない。というのは、連帯署名者の代表は韓景職となっているが、実際にその声明の起草者は大韓基督教長老会所属の金在俊牧師であったからである¹²。1950年代は両牧師の所属していた両教団がお互いに牽制していたが、その救国祈祷会における一致と協力は、その声明が教派を越えての作業であったということが裏付けられている。

金景在は1965年7月に「日韓屈辱外交反対大会」が永楽教会で開かれた意味を二つあげている¹³。一つは、教会が1919年「三・一独立運動」以降、45年ぶりに初めて民族の問題に取り込もうとしたということ。もう一つは、韓景職、金在俊などキリスト教指導者たちが教派を越えて一致していたということである。金景在の見方が妥当だとすれば、その声明書の意見は、当時韓国教会の一部のものではなく、韓国教会の全体の意見と受けとめられるであろう。

4 日韓条約批准反対運動

1965年六月に日韓条約が調印された後、韓国の教会は条約批准反対に転じている。集会は「国家のための祈祷会」と名付けられて、当時の有力牧師韓景職が牧会していた大韓イエス教長老会永楽教会で開かれた。大韓イエス教長老会の機関紙『韓国基督公報』の1966年7月と8月の紙面は日韓条約批准反対運動に関する記事で満ちている。新聞によれば1965年7月5日に5000人が参加している。その頃の指導者たちの対日本観をこの場で見よう。新聞によれば金在俊牧師は日韓会談を次のように解釈している。すなわち、「金博士は日本

の侵略政策は彼らの祖先から一貫した政策である
ということを歴史的に見せ」、「現在もその政策を
捨てていない」¹⁴、と述べている。韓景職の見方は
どうであろうか。彼の1965年6月27日の説教の一
部を引用しよう。「ちょっと前に日韓条約が締結
されました。…日本は過去36年間に渡って我が民
族と国家に対して言い切れない罪を犯しましたが、
今日に至るまで懺悔と誤る姿勢を見ることが
できません。朝鮮戦争を契機に日本の経済が拡大
し、日本の経済が復興されましたが、今日国交を
正常化するに当たって、少しも悪かったという態
度を見ることができず、むしろ自分たちの利権の
み、漁業権のみを得ようとする、…このような姿
勢を見る時、我が国民の感情を激昂させたことは
事実だと思います」¹⁵、と語った。二回目の救国祈
祷会は7月11日に開かれ、7000人が参加してい
る。新聞記事には各教派の信徒たちが参加し、朴
大統領宛に、日韓交渉が現在のままでは我が国家
の大地軸を動かす結果となるので中断してくださ
いという内容の書簡を送った。

8月1日の集会では、主張がより鮮明になって
いる。すなわち、「韓・日国交正常化は賛同するが、
屈辱的外交による韓・日協定批准は反対し、日本
は過去の罪を懺悔して〔会談に〕誠実な態度で臨
むべきである」と主張した¹⁶。興味深いことは、
この日に池明観が「条約解説を通して、日本の経
済的侵略の道具しかならないこの条約は反対すべ
き」¹⁷だと語った。日本に対する前述の3人の見方
は殆ど一致していると考えられる。後述の「日本
のキリスト者に送る」メッセージがその日に採択
されたのである。

5 日本のキリスト者に送るメッセージ

2500人が参加した8月1日の集会で「日本のキ
リスト者に」送るメッセージが採択されている¹⁸。
それが日本のどの機関に送ったかは不明である
が、その場では、「日本の佐藤首相に」そして「ア
メリカ大統領に」送るものも採択されている。日

本のキリスト者に送るメッセージがそれらと異
なっている点は、信仰に基づいているという点で
ある。冒頭で「主において一つの肢体となっている
皆さまの上に父なる神と主イエス・キリストの
祝福」を祈り、最後の段落で「お願いします。日
本の同じ信者各位も、われわれの苦しみをご理解
した上で、貴国内での対韓〔国〕の姿勢がもっと
良い方向に転換される必要があると感じました
ら、善意が広げられるようご協力して下さい、
われわれに大きな激励となりと存じます」と締め
くくっている。以下にその内容を要約してみよう。

まず、日韓条約の批准における前提条件が挙げ
られている。メッセージは「日韓両国民の恒久な
交わり」を樹立するために権力や理解を超えた「論
理的前提条件」が必要だと冒頭で述べている。そ
して、韓国人は日本に対して「怨恨」があると大
胆に言い表している。それは日韓併合により、日
本が韓国人に植え付けた「怨恨」であり、それは
日本のキリスト者が想像できないほどのものだと
日本のキリスト者に訴えている。そして、このま
ま批准が強行されると、「両国民間の親善よりむ
しろ葛藤と敵意が激化されるのは明白である」と
いう憂慮を示し、「昔からの怨恨を一掃し、真の
善意と協力が交流できる」ような関係を求めている。
最後に、「日本に〔私たちと〕同じ信仰を持
つ皆さまも私たちの苦しみを諒解し、貴国内での
対韓の姿勢がさらに良い方向に転換されることに
協力して下されば私たちに大きな激励になると
思われます。貴教会及び信徒の皆さまの上に三位
一体の神様からの祝福を祈願致します。1965年8
月1日国家のためのキリスト教職者一同」と締め
くくられている¹⁹。以上のような内容であったが、
文体から日本のキリスト者との親密感を感じられ
ない。それは、両国の教会がまだ和解関係に入っ
ていなかったからであろう。

6 批准反対運動の影響

1965年の反日運動の最中、韓国のキリスト者が

批准反対運動を展開した理由はこうである。「今度の日韓条約の内容を見ると、われわれは韓国に対する日本の態度が強者が弱者を扱う圧力、自国の利権樹立のための布石などを重んじている『新植民政策』の露骨的表現に過ぎないと看破しました。このまま批准が強行されると、両国民間の親善よりむしろ葛藤と敵意が激化されるのは明白です」²⁰。そのような悲劇が起こらないために、批准を拒否していると言明している。つまり、キリスト者たちは単純に「反日運動」を展開したのではなく「日韓の真の交わりのための精神的・倫理的布石」²¹を築くために戦ったと考えられる。われわれは、韓国キリスト者におけるそのような戦いの精神が日本の教会に伝えられたと見なしたい。というのは、次のような大村議長の発言は韓国キリスト者たちの抵抗運動なしには生まれなかったからである。同年〔1965年〕9月にソウルで開かれた大韓基督教長老会第五十回総会に参席した大村日本基督教団総会議長は次のように言う。

今春二月に、大韓基督教長老教会第五十回総会への招請をうけ、教団としては議長を代表として送ることを、すでにきめていた。ところが、その後、日韓条約の成立、その批准をめぐる、韓国の中に、とくにキリスト教会の間に、有力な反対運動のあることを知った。そしてその奥にあるものは、過去の日本が犯した残酷な政治に対する割り切れない思い、深い心の問題であることを知った。今まで日本の教会は、日韓問題の底にある問題に、十分責任をかんじていなかったし、韓国教会との和解や交わりに対しても、努力しなかった²²。

1965年の韓国民衆の抵抗の力が韓国の民主化運動に勝利をもたらしたとする評価が正しいならば²³、韓国のキリスト者たちの「救国祈祷」運動の力は日本の教会を動かしたと考えられる。それは、日本のキリスト者たちに、過去をみる謙虚さと、

韓国のキリスト者たちを隣人として見ることのできる視野をあたえたのではないかと考えられる。

- 1 「状況」については池明観氏の著書に多くを負っている。池明観『韓国現代史と教会史』新教出版社、1975年、46頁。
- 2 同上書、47-48頁。
- 3 同上書、48頁。約40名が重軽傷、150名が連行された。
- 4 同上書、49頁。在日朝鮮人の法的地位合意要綱仮調印（4月3日）。
- 5 『基督公報』第789号、1965.7.10、1頁〔「기독교보」〕。韓国基督教報社『韓国基督教報縮刷版』第2巻、1984年を参照されたい。
- 6 池明観、前掲書、52頁。
- 7 池明観『韓国と韓国人』アドニス書房、2004年、142頁。
- 8 『基督公報』第793号、1965.8.14、3頁。
- 9 『教団新報』第3464号、1965.9.18、4頁。cf.日本聖書神学校編『教団新報一九四一～二〇〇七』日本聖書神学校、2007年、(DVD)。
- 10 同上書。
- 11 同上書。
- 12 金景在『垣を越えて』ユトピア、2005年、47頁〔김경재「울타리를넘어서」유평아〕。
- 13 同上書。
- 14 『基督公報』第789号、1965.7.10、1頁。
- 15 『韓景職牧師説教全集 八』韓景職牧師記念事業会、2009年、365-366頁〔「한경직목사설교전집 8」、한경직목사기념사업회〕。
- 16 『基督公報』第793号、1965.8.7、1頁。
- 17 同上書。
- 18 同上書、二頁。
- 19 同上書。
- 20 同上書。
- 21 同上書。
- 22 『教団新報』第3464号、1965.9.18、3頁（傍点、筆者）。
- 23 池明観、前掲書、142頁。

（こう・まんそん 聖学院大学総合研究所助教）